

「夕樹」

*

天を仰ぎ見れば、灰雲の流れが視界を覆つ。そこに太陽の輪郭は無く、雨空の臭いがする風が流れ通る。

「予報通りか……」

今日の天気予報を思い出し、曾根崎祐護は足を止めていた。どうして、こういう気分きぶんの滅入る日に限つて、天気も悪いのか。悪い事は重なるもの。いや、単に今は梅雨の最中さいちゆうって**う**うだけの話か。

曾根崎祐護そねざきゆうごは鳳東大学のキャンパスを一人で歩いてた。薄暗い天気の中、鳳東大学の構内に人影はまばら。天気が悪いというだけで大学に来なくなる学生が揃そろっているのは、何ともはや、爽快だ。全く素直すじでよろしい。そんな日にどうして自分は大学にいるんだらう、と祐護は自分の行動パターンこうどうぱたーんに嫌気

が差した。講義も無い日に大学に来る暇人の汚名は、心地よくは無ない。

祐護は雲に追われるように歩みを速める。天気予報では、形の崩れた梅雨前線が通過する嫌な天気。折りたたみ傘は持もつていても、何かと面倒臭めんどくさいい。

「祐護？ お前、どこ行くんだ？」

聞き慣れた声に呼び止められた。そこにはジャー

姿あかきさひょうたの赤草兵太。祐護の悪友にして、留年危機仲間。

顔はいいの女性にょせいという所を全く見たことは無い。自分と連つらんでばかりいないで、さつさと彼女でも作ればいいのに、と祐護は思おもう。容姿が上の人物から埋めていかねば、下の人物には回まわつて来ないんだぞ。

解とつてるのか？

「どこ、つて言われてもな…。兵太こそ、どうして大学だいがくにいるんだ？」

「俺か？ 見ての通り、体育の講義だよ。もう一回もサボれねーんだよ。」

「そういえば兵太は去年、体育を落としたんだっ
な。幸運なことに今日、祐護には出席しなくてはな
らない講義は無い。じゃあ、自分は何で大学に
いるんだって！」

「あのさ、別にどうでもいいんだが。赤ジャージ、
似合っていないぞ」

「いや、ある意味似合ってるんだ。ある意味で。友
人としては、慎ましく生きる生き方を教えてやるべ
きだとは思うんだが……。」

「お、おお……。ホントは作務衣さむえで出たいんだけど、
土屋つちやのオッサン五月蠅いからよ」

「土屋？ ああ、あの筋肉オヤジか。確かにアイツ
は五月蠅いな、音量的に。でも、体育の授業で作務
衣もどうかと思うぞ。」

「祐護は赤草兵太が作務衣で土屋のオヤジに小言を
食らう姿を想像した。傍目はためには、なかなか面白そう
な情景だ。」

「お前いいの？ もう講義始まる時間だよ」

「祐護は自分の腕時計を差して言う。」

「あ、出席確認までに間に合えばいいんだって」

「それでこそ赤草兵太。律儀に時間前行動などする
わけが無い。そういう潔さを見ていて気持ちがいい。
祐護はそういう所は小心者だ。時間に遅れれば、落
ち着かない。時間前行動とまでは行かないが、時間
通りを目指して動いてしまう。」

「祐護……お前、今日履修あつたっけ？」

「チツ、気付きやがった。さすが、共に最小講義数
で留年を免れようと画策した仲だ。」

「ちよつと、ゼミに寄つたんだよ。出掛けるついで
に」

「もつとマシな嘘付けよ。どうせ家にいてもやるこ
と無いんだろ？」

「兵太め、こちらの事などお見通しってか。いや、
それは冷静な判断か。祐護が自らゼミに顔を出すは

ずも無い。実際、時間を潰しに大学に来てしまったんだ。それは大学近辺に下宿した者の宿命なのかもしれない。

「ところで、今日は彼女、来てないのか？」

「今は……、いない……な」

「ふくん、まあいいか。今度の飲み会にでも連れて来いよ」

「それは本人次第だろ。……そろそろ行けよ。チャ

イムなるぞ」

「おお、じゃあな」

浅草兵太は走るでも無く、ゆっくり体育館の方へと去って行った。本当に出席確認ギリギリに行くつもりか。

まあいいが、人の事など。自分もこれから向かう先があるのだから。

祐護はもう一度、空を見上げた。どんよりとした雲の暗い影。今の祐護との心境と同じく分厚い雲に

覆われた空。なんだか空の方が、祐護の心に合わせてくれたようで、小気味が良かった。

*

地下鉄を降りる頃には、本降りの雨が降り注いでいた。濡れた雑踏は黒く濺んだ液体で塗り替えられ、上を往く者を嘲笑っているかのようにも見えた。

駅の出入り口から地上に上がれば、目的地の百貨店は目の前だった。都心の高級百貨店。普段の祐護なら絶対来ないだろう華やかな街。煌びやかなウィンドに白い大理石。全く祐護に関連性の無い世界だ。ブランド物になど、金銭的に興味は無い。金が有ればべつだが……。

と、財布の中身をイメージして、祐護は山岡萌葱やまおかもえぎに後二回も焼き肉を奢らないといけない事を思い出した。確かに、勝負に負けて奢る約束はしたが、一人で五人前は喰ってたな。ほっそりしたスタイルの割

には大食いだ。それだけ山岡さんの普段の業務がハードなのだろう。お陰様で、こちらら今月の食費が来月分までトビそうだ。臨時収入のあった月とは思えない経済状態である。

祐護は案内表示を確認することもなく、エスカレーターを上がって行く。目的地が何階にあるかなんて、とこの昔に知っている。

そんな下調べをしても尚、今日まで足を運ぶのを躊躇った。

何でだろな？ そんなに来たく無ければ来なければいいのに。なのにこうして祐護は確実に目的地に向かっている。そんな思いを胸に、足取りは確実に重くなる。まあエスカレーターの流れに乗れば、いくら足が重くたって、勝手に目的地に着いてしまうのだから。

目的の階は人でこった返していた。それは祐護も予想外だった。こんなに人が集まる催しだとは思っ

ていなかった。

その盛況ぶりに、祐護は心を痛めた。こんなにも人が来てくれる、なのは何故……。

「あら？ 来たの？」

祐護に声を掛けてきた女性は心底意外そうだった。

「斎藤さん……。お久しぶりです」

さいとう たえこ
斎藤多恵子だった。先の事件を共に経験した一人。

いしづとつゆか
元、石津鳥塚病院の院長だった女性だ。

「久しぶりって、あんたね。手の怪我の抜糸、他の病院でやったでしょ？ なんでウチの病院に来ないのよ」

「斎藤さん。病院には『行っていい病院』と『行ってはいけない病院』の二種類があるんです」

「……何が言いたいのよ？」

「いえいえ、斎藤さんも大変じゃないんですか？ 病院があんな事になって。だからですよ」

「はあ……、それもそうね。さすがに私も、あんな

事になるとは思っ て無かつたわ」

斎藤多恵子が院長だった石津鳥塚病院は、もう存在しない。今月の頭に医療法人の理事長が交代となり、病院名も変更になったのだ。

その名も「石津医療センターアマノベ」。

そう、彼女が病院を乗っ取ったのだ。まだ「天野部涼子病院」としなかつただけ、誉めてやりたい気分だ。何考えてるんだか、全く。

「別に私はそんなに未練は無いんだけど、逆に院長を辞めれなくなつたわね。あの子、私を死ぬまでこき使う気よ」

「犬飼さんの件がありますから、洒落に聞こえませんね」

犬飼政隆も先の事件の体験者。この言葉が適当か分からないが、いわば『同志』である。その犬飼が社長をしていた会社も、仲の悪いはずの父・天野部英将派と株式交換をして、天野部涼子が筆頭株主に

なつた。臨時株主総会での正式承認はまだであるが

元々商社だったはずの会社が、次々と別会社を買収し、業務規模の分類から言えばIT系企業の仲間入りを果たしていた。勿論、社長は犬飼政隆のまま。

当然、犬飼さんは盆と正月が一度に来たような忙しさ。急成長の企業の代表としてテレビにも出演していたのを見た。犬飼さんが天野部涼子の子飼いになつたという、洒落なのか洒落でないのか、もう何が何だかわからない状態だ。

「ホントねえ、噂では犬飼さん、美枝さんにアゴで使われてるらしいわよ」

「それリアル過ぎます……」

祐護が想像するに犬飼さんは結構、その状況を楽しんでるのではないかと思う。なんだかんだ言つてあの人も物好きなんだから。

「あの子は一緒じゃないの？」

「なんで、自分が一緒に来ないといけないんです

か？」

「あら？ 色々聞いてるわよ、噂は」

「……。はあ、情報源は真理まじさんですね？ あの人も無口な割にお喋りなんだから」

「フフ、言ってるわ」

祐護と斎藤さんは、二人ならんで会場を目指す。

その間、二人に会話は尽きない。あれから約一ヶ月。

二人に近況報告の華が咲く。

天野部家の支援を得た原明枝は既に日本にいない。

意気揚々としてオーストリアの音楽団に旅立っていた。空港に見送り行った祐護は、原明枝の天野部家の対応について愚痴られた。どんな状況になろうと愚痴はあるものだ。その方が明枝さんらしいと言えはそうだろう。

そして彼。斎藤さんも今度開かれる彼の公判を傍聴しに行くと言っている。祐護は少し迷っていたが、多分行くんだらうな。今日と同じ様に。

二人の歓談は止めどなく続く。この一ヶ月で変わった事。終わりを告げた事。新しく始まった事。本当に色々あった。

祐護自身、何も変わらないのに世界が刻々と姿を変える。それこそ世界に取り残されている気分だ。

自分が変わりたく無いわけでは無い。変われないわけでも無いと思う。でも、変わってしまうことに抵抗感拭えない。それは不可逆変化。もう元には戻れないのだから……。

不意に祐護が足を止める。いや、会場を前に足が止まる。このまますんなり入場すればいいものを、足を止めてしまうなど愚の骨頂。それは躊躇ためらえと言っているのと同じ行為だ。

その祐護の様子を見た斎藤さんは失笑を漏らし、踵かかとを返す。

「私はこれで行くわ」

「あれ？ 斎藤さんは見に行かないんですか？」

「私は帰りよ。もう飽きるほど見せてもらったわ。覚悟して行ってきなさい」

斎藤さんは柔らかい笑みで送り出してくれた。斎藤さんと会えてよかった。もし、今の一押しがなければ、この場で本当に歩みを止めていたかもしれない。そして今、一人にしてもらって良かったのかもしれない。自分の意思でこの先に進んだ方が、自分の為でもある。

この先にある物。正直、余り見たくない。でも、今日その為に来たんだ。今日行くべきだと感じた。今日で無ければならない気がした。斎藤さんもそうだろう。だから斎藤さんとも会えた。今日が最終日。今日を逃せば、次はいつ会えるか分からない。今日が峰方剛作品展の最終日だ。

祐護は意を決して入場した。

そこは色取り取りの世界。世界中の風景。絶景の風景。日常の風景。それは峰方剛の見てきた情景。

峰方剛の見てきた世界。彼の人生の歩み。彼が見て、彼が経験して、彼が描いた世界。それが会場一杯に広がっていた。

その中央、会場の最目立つ所に一枚の絵がある。そこにあるのは、美しい黄昏色の絵。

ラスト・トワイライト
『最後の黄昏』

祐護が勝手に銘打った『最後の黄昏』は『夕樹』と名付けられて展示されていた。

天才風景画家・峰方剛、最後にして最期の作品。この展覧会の目玉だ。この遺作を発表する場として天野部涼子がお膳出していた展覧会。それも盛況の内。今日終わる。

だから、祐護はここに来た。もう見る事は無いと思っていた、この絵に会いに。

祐護はそっと目を瞑り、つむ 瞼に焼け付いた生前の峰方剛の姿に語りかける。

今日はこれを言いに来ました。

峰方さん、さよならです。

これにて、自分はこの事件を過去にします。

いつまでも過去に縛られるなんて、人間の進むべき道じゃないですよ？

みんな、それぞれの道を歩いてます。

多分、峰方さんにも道はあったと思います。

自分は峰方さんの代わりにはなれません。

だから、自分は自分の道を行います。

それが、どんな道かはわかりません。

ただ前に進むのみ。それだけです。

自分は自分の日常に戻り、生きていきます。

ただ歩いていた。

何て事はない。余韻に浸るとか、クールダウンとか、そういう類の奴だ。それでも祐護の気分は悪くない。すがすがしいとまではいれないが、モヤモヤした気持ち悪い引っかけりは、すっかり無くなっていた。

今日来て、良かったんだろ？ 死んでしまっ

た峰方さんに別れの挨拶をするのは、まるで峰方さんを切り捨てるみたいで嫌だった。でも、今はその後ろめたさも消えていた。

祐護は思う。本当にもう、あの事件は終わったん

だと……。

不意に車のクラクションが鳴った。背後より車の

停止音。

その後、祐護はどのように展覧会場を後にしたの

か覚えてない。地下鉄に乗ることもなく。雨の中を

はぁ。もう振り向かずとも解ってしまう自分が痛々しい。既に散々聞かされた青いシルビアのクラ

クシヨン。

全く。何で自分がこの道を歩いているって分かるんだ？ 偶然って言葉じゃ済ませられないぞ。発信器でも付けられたか？

「祐護、買い物行くわよ」

予想通りの人物の声に、頭痛がしそつだ。

「昨日行つたばかりだろ？」

「今日は池袋よ。さつさと乗りなさい」

天野部涼子の声は実に楽しげだ。

祐護は天を仰ぎ見た。

いつの間にか、雨は止んでいた。

「夕樹」終